慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 「佛語自在」、「九體伊呂波」、「國盡」：橋爪貫一の洋学入門書 |
| Sub Title | "Futsugo-Jizai", "Kyutai-Iroha", "Kunizukushi" : a bibliographic study of handbooks by Kannichi Hashizume |
| Author | 関場, 武(Sekiba, Takeshi) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1993 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.5- 24 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 松原秀一教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0005 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「佛語自在」、「九體伊呂波」、「國盡」

## ――橋爪貫一の洋学入門書――

関場武

明治初期～中期にかけて、青木輔清と並び啓蒙的な著作を数多くものした人物に橋爪貫一（明治一七〈一八八四〉年九月歿）が居る。洋学関係では「佛學捷徑七ツ以呂波」や「英學捷徑九體伊呂波」、字書・辞典関係では「新撰漢語字林大成」、「訓蒙康熙字典」、往来物・教科書関係では「世界商賣往來」[注1]、「小學讀本」、それに「内外新報」や「東京新報」等の新聞の編集・刊行といった具合に、五、六十点程の著作を次々と出版している。何しろ一万二千余語を収載する漢語辞典を二十日で脱稿し二十日で銅刻を完成させたというのであるから（「讀書自在」）、書物造りに相当な情熱を持っていた人物であることは間違いない。松園橋爪貫一については、松井利彦氏の御論考中にふれる所があり（「近代漢語辞書の成立と展開」平成2・11）、筆者も「學鐙」八九巻五号（平成4・5）「漢和・漢語辞典の歴史」の中で、その著作を簡単に紹介したことがあるが、石井研堂の言う（「幕末明治新聞全集」4・解題）「維新前後の雑著家で、英書を讀み、松園とも松廼屋とも號し、啓蒙的小著に富」む彼の全貌を捉えることは容易ではない。「土居光知や南方熊楠を次ぐ学者で」「松原氏ほどに博識の学者を私は知らない」と称えられる（中公文庫「中世ヨーロッパの説話――東と西の出会い」平成4・3　中西進氏解説）松原秀一氏ならいとも容易いことであろうが、教養の無さから同氏の話されることの半分も理解し得なかった小生にとってはとても無理。取り敢えず橋爪貫一の洋学関係の著作の幾つかについて報告を提出する次第である。

## 一、「佛語自在」、「佛學捷徑七ツ以呂波」

長崎の阿蘭陀通詞本木正栄らによる「佛郎察辭範」（文化一一～一三〈一八一四～一六〉年頃成ル）は写本のまま刊行されることなく了ったが、邦人によるフランス語学習の成果は、茂亭村上英俊の「三語便覧」（嘉永七〈一八五四〉年序刊）に始まり、「洋學捷徑佛英訓辨」（安政二〈一八五五〉年）、「五方通語」（同四年）、「佛語明要」（元治元〈一八六四〉年）と次々と出版されて行く。そして、開成所から「法朗西単語篇」（慶応二〈一八六六〉年）や「法語階梯」（同三年）、「佛語初歩」（同）が、また、民間でも桂川甫策の「法蘭西文典字類」（慶応三年）や「英佛単語便覧」（明治元〈一八六八〉年）等が印刷にふされ、「明治四年辛未正月新鐫／嵜陽　好樹堂譯」の「官許佛和辭典」[注2]（NOUVEAU DICTIONNAIRE FRANÇAIS-JAPONAIS Renfermant Les Principaux Mots Composés Et Un Grand Nombre De Locutions.）と続いて行く。その中にあって、橋爪貫一もまた、オリジナリティは疑わしいものの、「挿譯佛蘭西文典」（慶応三〈一八六七〉年）、「佛學捷徑七ツ以呂波」（明治三〈一八七〇〉年春）、「佛語自在」（同七月）といったフランス語入門書を出している。「挿譯佛蘭西文典」は未見であり、「佛學七ツいろは」については既に拙稿を発表しているので[注3]、今回は「佛語自在」の書型および内容を中心に紹介して行くこととする。

中本左袋綴一冊。明治初期の洋学関係の書物はこの型式のものが多いが、橋爪の著作もこの形のものが多い。但し「世界商賣往来」等は普通の右綴じである。表紙　渋刷毛引。竪一八・一、横一二糎。題簽　子持ち枠付短冊形白紙、表紙中央上寄りに貼付。「佛語自在　一」。竪一一・七、横一・九五糎。前見返し　黄紙。匡郭内を中央の欄

が幅広くなるように界線で縦に三ツ割にし、真中に大きく「佛語自在」と出し、右に「官許明治三庚午歳初秋」、左に「誠之堂蔵版」と記す。

内題　本文初丁オ上方に「佛語自在」と横書きに出す。尾題　終丁ウ右上スミに「佛語自在巻一終」とあり。

柱刻　白口、上魚尾黒。上方に「佛語自在」、下方に重線を置いて丁付。凡例部分のみウラ側、魚尾の下に「凡例」と出す。丁付　（凡例）一～二、（本文）一～二十四。丁数　二六丁＋奥付。匡郭　四周単辺。竪一三・六、横八・九糎。

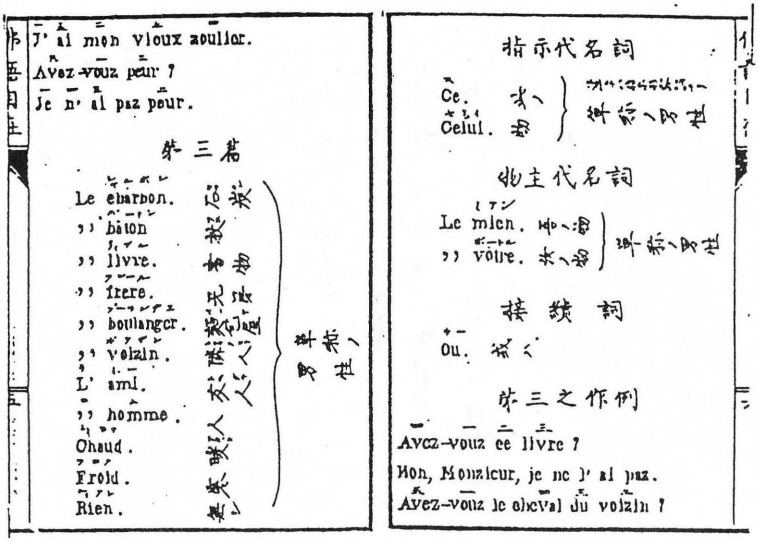
刊記　後見返し匡郭内右上方に、「官許／明治三庚午年七月彫成」と出し、下方に「橋爪貫一　編輯／松井次郎　藏版」と記す。そして、界線を置いて左上方に「發行／書肆」と大きく出し、下に「大坂心齋橋通南久宝寺町伊丹屋善兵衛／同　心齋橋通北久寶寺町河内屋源七郎／同　心齋橋通備後町角近江屋平助／京都東洞院三条通上ル村上勘兵衛／東京日本橋通二丁目山城屋佐兵衛／同芝神明前岡田屋嘉七／同　同和泉屋吉兵衛／同本石町二丁目角椀屋喜兵衛」と、三都八名の書肆を列記する。

巻頭にある凡例（「佛語自在凡例」）はやや長文であるが、次の通りである。

此書ハ、法朗西ノ文法通語ノ書ニシテ、日用ノ手簡ヨリ會話ニ便ナル爲ニ編次セル者ナレハ、熟讀數過ニシテ佛ニ入ㄱ容易ナリ、專ラ初學ノ者必讀ノ書、且商家交易ノ際、譯者ヲ待タズシテ事ヲ便スルニ易カラン

此書ヲ以テ佛學ニ志ス徒ハ、第一篇ニ擧タル所ノ数語ヲ數回熟讀シ、悉ク暗記シ得ハ、第一ノ作例ヲ容易ニ讀ミ得可シ、若シ之ヲ讀ミ得ル能ハサルハ、未ダ第一編ノ数語ヲ暗記スルㄱノ熟セザルナレハ、再ヒ之ヲ熟讀シテ、而后作例ヲ暗誦スルノ域ニ至ル可シ

原ト西洋ノ字音ハ、我　邦ノ字音ヲ以テ發スルㄱ甚難シ、且佛字ハ二十五字ニシテ、我五十音外ノ音ヲ生ル故ニ、




「佛語自在」本文5ウ・6オ

我假字二字ヲ以テ彼カ一字ニ讀マシムルアリ、ルアハルアニ同シカラズ、イュハイユニ異ナリ、更ニ小サク書シテ假字ヲ挿ム者ハ、其音アリト雖ヒ、微ニシテ口外ニ洩レ聞ヘズ、其二十五字ノ中ニ母子ノ別アリ、韵母AEIOUYノ六字ハ、一字獨用シテ音ヲ發シ、餘ノ子字十九字ハ、韵母ニ合シテノミ音ヲ發ス、故ニ数字ヲ列ネテ一語トスルニ、母韵ノ字ト子韵ノ字ト列ネ、或ハ母音並書シ子音並書スルヨリ、音ノ響クト不響トアリ、故ニ、卷首ニ記セル伊呂波ヲノミ讀得ルトモ、推テ知リ難シ、是ヲ以テ一一ニ假字ヲ以テ音ヲ加ヘ、次ニ譯ヲ示ス、片假字スラ讀得ル徒ハ、此書ニ依テ佛学ノ自在ヲ得ランカ

句讀又斷落ノ点記アリ、右ノ如シ、，ハ讀ナリ、文意ノ斷レル「ナシ、．；ハ句ナリ、語脈斷レテ文意斷レズ、・ハ全文全章ノ終リ、？ハ疑問ノ意ヲ標ス符號ナリ、一ハ代名詞ノ上ニ動詞アルトキ其間ニ置ク、〇他ノ書ニハ二語或ハ三語ヲ列ネテ一ノ熟語トスル𪜈用フト雖

ヒ、此書中未ダ其域ニ至ラズ、全ク本文ノ外意果ナシ、，ハ畧点ナリ、冠詞ノ尾ト語ノ頭トニ母韵ノ字アリテ、母韵重ナルヒハ、冠詞ノ尾ニアル母韵ノ字ヲ省ヒテ、此畧点ヲ用フ

左ノ数点ヲ辨セサレハ、意味徹底セズ、須ク諳記スベシ、餘ハ後編ニ至ルニ非ザレハ用ナキヲ以テ茲ニ不挙、且此篇ハ易キヲ主トシタレバ、精粋ナルハ後篇ニ讓ル故ニ、規則格法其外未ダ茲ニ盡サズ

明治三午歳孟春　　松屋貫一誌」

内容は、凡例に言うように、まず「大字伊呂波」としてABCDのアルファベットを活字体大文字で出し、次いで「平字伊呂波」として同じく小文字を振り仮名付きで出して、第一篇に入る。第一篇は、はじめに「定冠詞」としてLe. ガ・一格　Du. ノ・二格　Au. ニ・三格　Le. ヲ・四格の四つを掲げ「單称ノ男性」とする。そして以下、Le pain. 麪包　，savon. 石鹸　,,sucre. 砂糖　,,papier. 紙　,,chapeau. 帽子～,,monsieur. 君に至る「單称ノ男性」「普通名詞」を十語、Je. 吾　vous. 汝　Le. 其レの一～三人称の「人代名詞」、Beau. 良キ　Vieux. 古キ等の「模様形容詞」、Mon. 吾ノ　Votre. 汝ノの「物主形容詞」、Quel. 誰ノ・何・の「不定形容詞」、Oui. 然リ　Non. 否ナ　Ne-pas. 無シの「極メ」「打消シ」の副詞、「前詞」(De. 之・)、「動詞」(Ai. 持ツ　Avez. 持ツ) をあげて、それらを使った例文「第一之作例」を示す。作例は Avez-vous le chapeau? Oui, Monsieur, j'ai le chapeau. Avez-vous mon pain? J'ai votre pain. Avez-vous mon vieux chapeau de papier? Je ne l'ai pas. の如く、訳す順序を漢文を訓み下す時と同じように数字で示し、掲げている。これは、和蘭語や英語の学習書に既に見られる方式であり、本書独自のものでは無い。なお、例文に訳や讀みは付いていない。そして、この調子で第十三篇「不定法」「現在」まで続き、作例はVoulez-vouz me donner de l'argent pour en acheter? Je veux vous en donner, mais je n'en ai guere. で終っている。たしかに、熟読、反復暗誦して行けば、

初学の徒にも理解できるように仕立てられており、その意味では「佛語自在」の題名も強ち誇大なものではない。それゆえ続篇も待たれるところであったが、凡例に言う後編が出たものかどうかは不明である。

さて、橋爪貫一は、本書の出版より少し前、明治三年三月に「佛學捷徑七ツ以呂波」を出している。同書については既に拙稿で紹介したことがあるので、書型等はそれよっていただきたいが、書型・内容共に当時流行っていた碧海阿部為任著、「英學捷徑七ツ以呂波」（慶応三〈一八六七〉年九月刊）を基にし、英語を佛語に置き換えたものである。例えば、その序文である。「英学七ツいろは」と「佛學七ツいろは」の二つを並べて見ると、その焼き直しの様がよくわかる。

這のいろは。並に楷字。五十韻字等は。英人著述の。日本文法書。又日本辭書より。抄出したる者にして。敢て臆断私意を。以てするものにあらす。然りと雖も。大方君子の高覧に供するに足らす。たゝ僻村遠郷にある。児輩初学の捷径ならんかといふ。慶應丁卯の秋月。　碧海　阿部為任誌（印二箇）〈英学七ツいろは〉

這のいろは並に楷字五十韻字等は、佛人著述の日本文法書又日本辭書より抄出したる者にして、敢て臆断私意を以てするものにあらす、然れは、大方君子の高覧に供するに足らす、たゝ僻邑遠郷の児輩をして、初學の捷徑ならん事を希になん　桂洲騰園（印）〈佛学七ツいろは〉

すなわち「佛學捷徑七ツ以呂波」のそれは、英学の序文の「英人著述の」を「佛人著述の」に代え、「然りと雖も」を「然れは」に、「僻村遠郷にある。児輩」を「僻邑遠郷の児輩をして」に、「ならんかといふ」を「ならん事を希になん」とし、英学に在った振り仮名を一切省いているだけなのである。とくに「英人」を「佛人」に替えた個所等は、安直に過ぎるところであり、本文も「英学七ツいろは」の英語の部分を佛語に置き換えれば、そのまま「佛學七ツいろは」になるといった態なのである。はじめにアルファベットを出し、次に des nombres として数字を示し、五ウに「佛字以呂波／

風顚月癡生（印）」と大きく出し、以下本文に入っている点。一五オ右方に「子母五十韵字／桃源釣徒（印）」と出して、以下母韻、子韻、それに五十音図を出している点。それらはすべて「英学七ツいろは」の順序に従い擦って行っているのである。本文の四行七段の掲出順も、真仮名の字母を含め、英学のそれと同じである。但し、「英字以呂波」では半濁音に真仮名の呈示が無かったが、本書には入っており、ラ行がRでなくLを使って表記してある点が異なっている。それに、英語と仏語の違いから、綴りの一部も当然異なっている。

## 二、「英學捷徑九體伊呂波」「英字三體苗字盡」

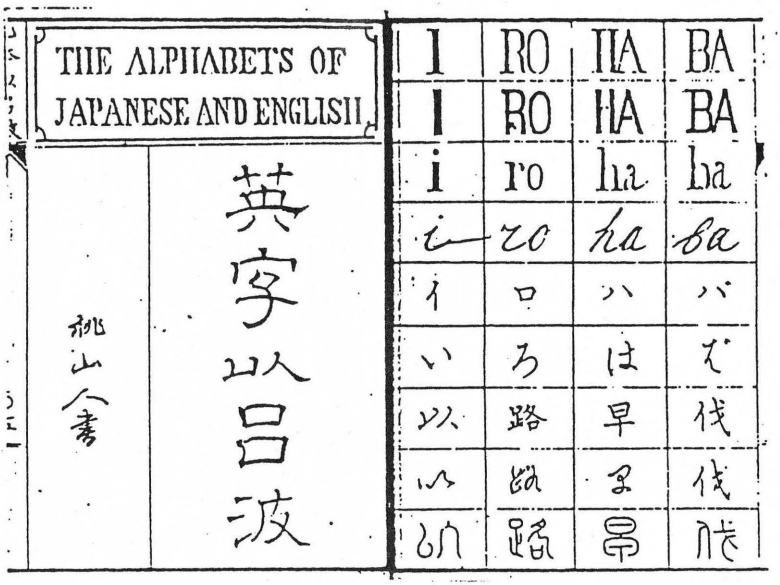
さて、右に見た如く、「佛學捷徑七ツ以呂波」は、「英學捷徑七ツ以呂波」の英語の部分を仏語に置き換えただけといったものであったが、松園橋爪貫一には、もう一つ、「英學捷徑七ツ以呂波」に準拠した著作がある。明治四（一八七一）年八月の「英學捷徑九體伊呂波」である。同書は

起先に英学七ついろはといへる書世に出てより、英學に志すの童蒙、其益を得る支少からすと雖も、今英國撫良翁子の著せし書によれは、文字の綴續に於て纔僅の差異あり、故に之を更改増訂して、以て世に公にす、是か非か猶後の君子の校正をまつ　明治四辛未歳壯月　松園　橋爪貫誌

という序を以って刊行されている。ここで言っている「英國撫良翁子の著せし書」とは、一八六三年に上海のPresbyterian Mission Pressで印刷刊行されたS.R. BrownのColloquial Japanese, Or Conversational Sentences And Dialogues In English And Japanese のことである。その中のSentences in English and Japanese Colloquial の部分を翻

刻・修訂した版が望洋書屋から出ており、その奥付に「松園橋爪氏藏版　東京礫川　發行書房　青山堂雁金屋清吉」とある一本がある。すなわち、本書の著者橋爪貫一がその刊行に関わっているわけで、「佛学七ツいろは」序文の「佛人著述の日本文法書又日本辭書より抄出した」等という怪しげな記述とは違い、たしかに撫良翁（ブラウン）の著を参照しているということになる。例えば、「英學捷徑七ツ以呂波」に dsi, tsu, dsu, su, zu とあったヂ、ツ、ヅ、ス、ズを、本書では ji, tsz, dz, sz, dz と変えているが、これは恐らく S.R. Brown の Colloquial Japanese の巻頭 System of Notation for Romanizing Japanese Words. 中の KATAKANA SYLLABARY の表に基づいての改変であろう。但し、見たと言ってもその程度のことである。書型は次の通りである。

中本左袋綴一冊。表紙　黄色地紙に紗綾形模様空押し。竪一八、横一二糎。題簽　表紙右肩、単枠付短冊形白紙。「英学捷徑九体以呂波　全」。竪一二・一、横二・二糎。前見返し　青色紙。界線で縦に三つに区切り、中央の欄上方の枠内に JAPANESE AND/ENGLISH ALPHA-/BETS IN NINE DIF-/FERENT FORMS. の英文タイトル。その下に「英學捷徑九體伊呂波」と大きく記し、右欄上方に「橋爪貫校訂」、左欄に「東京　青山堂梓」と出す。柱刻　上魚尾黒。「九体以呂波」。下方に○印を置いて丁付があり、その下に二重の界線を置く。丁付　一～二十一。丁数　二十一丁（二十オまで本文、ウは広告）＋奥付。匡郭　四周単辺。竪一四・八五、横九・七糎。行段　本文は四行九段。刊記　後見返し貼付の奥付を縦に二ツ割りにし、右上方に「官許」、左に「東京書林　小石川大門／雁金屋清吉發行」と記す。後印の一本はそれとは少し異なり、後見返し匡郭内に、上部に「發行／書林」と出し、その下に右から、「大坂心斎橋通り　伊丹屋善兵衛／仝所　敦賀屋九兵衛／東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛／仝二丁目　山城屋佐兵衛／同所　須原屋新兵衛／仝芝神明町　岡田屋嘉七／仝所　和泉屋吉兵衛／仝横山町三丁目　和泉屋金右衛




「英學捷徑九體伊呂波」本文・冒頭

門／仝浅草芽町二丁目　須原屋伊八／仝下谷數寄屋町　岡村屋庄助／仝本町三丁目　上州屋宗七／仝日本橋四日市　和泉屋半兵衛／仝小石川大門町　鴈金屋清吉板」と計十三軒の書肆名を列挙する。

備考　巻末の広告は(イ)、「世界商賣往来　第一編」、(ロ)、「漢語捷徑　第一編」、(ハ)、「鼇頭史略字引」の三点の、内容案内付のもので、いずれも橋爪のものである。(イ)は「橋爪貫著」として「西洋諸品物を圖画し、其知れ難きものには注釋を加へたり」とあり、(ロ)は「橋爪貫校」として、「洋学者は洋音にくわしと雖も、漢学者は漢音を知らす、故に今此書を上梓して、以て童蒙に漢音を知らしむるの楷梯とす」とある。(ハ)は「橋爪貫輯録　全一冊」として、「之は四書、五經、文選、十八史畧、元明史畧、國史畧等の字引にして、加るに熟語を以てせり、故に童蒙は必す欠くべからさる書なり」と説明する。

内容は、はじめに前引の序文があり、次いでTHE ENG-

LISH ALPHABET IN CAPITAL LETTERS「英國頭字／玄光書」として、活字体、筆記体、ゴチック体の各大字訓み仮名付きのアルファベット表、続いてTHE ENGLISH ALPHABET IN SMALL LETTERS「英國小字／江玄光書」と題し、訓み仮名付き、活字体・筆記体小文字のアルファベット表を出す。ゴチック体の分だけ「英学七ツいろは」より多いが、訓みはC（スイー）、H（エイツチ）、J（ゼイ）、N（エン）、R（アル）、V（ウイー）、W（ドブリユー）、X（エツキス）、Z（ズイー）等で、七ツいろはと同じである。そして、五ウにTHE ALPHABETS OF JAPANESE AND ENGLISH「英字以呂波／桃山人書」と題し、六オ以下九体イロハの本文に入る。英字が大文字活字体二種（一はゴチック）、小文字活字体、筆記体小文字の四体。和字が片仮名、真仮名、同草書体、同篆書体の五体。合わせて九体である。一五オまでの本文で原本の「英學捷徑七ツ以呂波」と異なる点は、書体数、ヂ、ツ、ヅ、ス、ズの綴り、鼻濁音を示すためかガ行音をHGA, HGI, HGU, HGE, HGOと表記している点等である。このHGA式の表記であるが、Brownの著のngaのnの筆記体をhに見誤った可能性もある。一五ウからは数字で、ARABIC.「亞刺比亜數符」（楳塢主人書）、*Roman*「羅馬数符」（竹齋閑人書）と二つに分け、「英学七ツいろは」のそれを大巾に増補しているが、発音の方は、5. Five（フイフ）. 11. Eleven（イーウン）. 13. Thirteen（ヂルヂイーン）. 20. Twenty（ヂウインヂー）. 30. Thirty（ヂルヂー）. の如くで、あまりいただけない。（注4）なお、最後一八オ～二一オにかけては「子母五十韻字」（秋齋山人書）と称する母韻と子韻および筆記体小文字片仮名付きの五十音図がある。因に明治七年四月刊の「新刻書目便覧」によると、本書および「佛學捷徑七ツ以呂波」の値段は各々十銭である。

ところで、右にあげた「佛學捷徑七ツ以呂波」と「英學捷徑九體伊呂波」が準拠した阿部為任の「英學捷徑七ツ以呂波」は、実は、江戸時代に盛んに行われた往来物のうち、「七ツいろは」に基づくものである。（注3）松園橋爪貫一には、他にも、江戸期の往来物に基づいた著作がある。例えば、明治四（一八七一）年の「英字三體名頭字盡」と「英字三體苗字盡」である。これらは、いず

れも、江戸期の「五體名頭字」（文政十年版等あり）（注5）や合書型往来に収載の「名頭字盡」、「苗字盡」、「撰新名字往来」（天保十一年刊）といった往来物の流れを汲むもので、それにローマ字表記を加え新しく装ったものである。今「苗字盡」の方を紹介すると、大略次の通りである。

中本左袋綴一冊。表紙　黄色地紙に網目模様空押し。竪一八・四、横一二・七糎。題簽　子持ち枠付短冊形白紙。表紙中央上寄りに貼付。「英字三體苗字盡　全」。竪一三、横二・四糎。前見返し　子持ち枠内を真中の欄が大きくなるように縦に三ツ割りにし、中央に「英字三體苗字盡　全」と隷書体で大きく書名を出し、右上に「橋爪貫一著」、左に「東京書林　萬笈閣蔵行」と記す。

扉　まずオモテは、匡郭内を縦に三ツ割りにし、中央に大きく「英學苗字盡」と出し、右上に「橋爪貫一撰著」、左下に「耕毫　凧李子（印「竹／内氏」「梅／人」）と筆工名を記す。ウラは、匡郭内に「EIHGAKU/MIYAUJI/DSUKUSHI.」と活字体大文字で三段に出す。

柱刻　白口、上魚尾黒。上方に「英学苗字尽」、下方に丁付。但し扉には丁付無く、はじめのアルファベットを示している三丁には書名が無い。丁付　口一～口三、一～廿一。丁数　二五丁（扉一＋（アルファベット表）三＋（本文）二一）。匡郭　四周単辺。竪一四・四、横九・三五糎。行段　本文は二行八段。

刊記　終丁ウ本文末右方に、左から「明治四辛未歳六月新鐫／橋爪貫一著／東京書肆　椀屋喜兵衛」とある。また後見返し匡郭内に、「松園橋爪先生編輯目録　萬笈閣蔵板」と題して、「開知新編」以下「獨逸名頭」に至る八点の広告を載せる。

本書は「前田 MAEDA, 徳川 TOKUHGAWA」～「間宮 MAMIYA, 曲淵 MAGARIBUCHI」に至る一六六名の苗

「英學苗字盡」本文・冒頭

字を、漢字表記と英字三体（活字体訓み仮名付き大文字、活字体小文字、筆記体小文字）で示したもので、源、平、藤、橘～一郎、次郎、三郎、殿、様のローマ字綴りを掲げる「英字三體名頭字盡」（EIHGAKU NAHGASHIRAJI）（明治四年六月　萬笈閣刊）と対をなすもの。はじめに、発音振り仮名付きの活字体大文字、小文字、筆写体小文字のアルファベット表をあげ、次いで活字体小文字の五十音図を出し「英字／和解」と記す。五十音図ではシ、ス、チ、ツは各々si, su, tchi, tsuであるが、本文ではSHI, SZ, CHI, TSZになっている。また、毛利MOORI, 大河内OOKOOCHI式の表記を採るが、加藤KATOU, 内藤NAITOO, 藤堂TOODOOの如く齟齬を来している部分もあり、西尾niahioの如き誤刻もある。ガ行音は津輕TSZHGARU, 上杉UYESZHGI, 溝口MIZOHGUCHI, 五島HGOTOOが基本型。

## 三、「英字三體大日本國盡」、「横文字六大洲國盡」

橋爪には、この他にも、江戸期の往来物にローマ字等を加え、開化の世に受け容れられるべく工夫した著作物がある。「英字三體大日本國盡」、「横文字六大洲國盡」がそれである。まず、「英字國盡」を取り上げる。

中本左袋綴一冊。表紙　濃縹色地紙に網目模様空押し。竪一八・四、横一二・七糎。題簽　三重枠付短冊形白紙。表紙中央上寄りに貼付。「英字三體大日本國盡　全」。竪一三・一、横二・四糎。前見返し　子持ち枠内を、中央の欄が大きくなるように縦に三ツ割りにし、右上に「橋爪貫一著」、中央に「英字三體大国本國盡　全」、左に「東京書肆　萬笈閣發行」と記す。序題　英字國盡自序」。内題　英字大日本國盡」。

柱刻　白口。上魚尾黒。上方に「英學國盡」とあり下方に丁付。丁付（本文）一～十七。初二丁にはナシ。丁数　一九丁＋見返し。行段　本文　有界八行二段。匡郭　四周単辺。竪一四・四、横九・三糎。

刊記　終丁ウ匡郭内左方に「明治四辛未歳六月新鐫／橋爪貫一著」とあり、右方に「東京書肆　本石町貳丁目　椀屋喜兵衛」と記す。また、後見返し匡郭内左方に「松園橋爪先生編輯目録　萬笈閣蔵板」と出し、界線を置いて右に「開知新編　全八冊／英字大日本國盡　全一冊／佛字大日本國盡　全一冊／獨逸大日本國盡　全一冊／度量考摘要　全二冊／英字名頭　全一冊／佛字名頭　全一冊／獨逸名頭　全一冊」の八点の広告を上下二段に記す。これは、前出の「英字三體苗字盡」の巻末に付載のものと同一である。

内容は、江戸期の往来物のうちの「大日本國盡」、「國名づくし」を襲ったもので、五畿内、五箇國、山城、大和～二

嶌、壹岐、對馬、附りとして、八丈島、無人島、琉球を加えたもの。はじめに漢字で見出しを立て、下にそのローマ字表記を、活字体大文字（片仮名振り仮名付き）、同小文字、筆記体小文字の三体で示す。自序に「撫良翁氏ノ書ニ従テ」と言う如く、「英學捷徑九體伊呂波」と同じように攝津 SETSZTSZ, 駿河 SZRUGA, 伊豆 IDZ, 但馬 TAJIMA 式の綴りを採用しているが、遠江 TOOTOOMI, 近江 WOUMI, 薩摩 SATSMA の如く食い違いを見せている個所もある。ガ行音は、「英學苗字盡」や「英學捷徑九體伊呂波」と同じく、長門 NAHGATO, 越後 YECHIHGO 等、HGA, HGO 式に表記している所と、そうでない所が混在している。巻頭序文の後に、ABC～V W X Yのアルファベットを、活字体大文字、小文字の三体で示し、巻末には、十二支、十干、東西南北を、本文と同じく漢字と英字三体で掲げる。うち十干は、甲 KAU, 乙 WOTSZ, 丙 HEYE, 丁 TEE の音訓みと、KINOYE, KINOTO, HINOYE, HINOTO のエト式の訓みの両方を、上下二段に示している。なお戊 DO とあるのは、明らかな誤刻である。自序では

近時、洋學益彌多盛ニシテ、其書又牛ニ汗スルニ至ルト雖モ、未タ彼ノ國字ヲ以テ、我カ　国名地名及ヒ町名等ヲ記載シタルモノナク、英吉利作文ヲ成スノ徒、之ヲ遺憾トスト聞ク、故ニ今茲亞國撫良翁氏ノ書ニ従テ、僅少モ私意ヲ加エス之ヲ記載シテ、以テ童蒙ニ便ス、若シ之ヲシテ英國作文ノ一助トナラバ、余カ僥倖ナリ　　明治四未歳六月　橋爪貫一誌

等と力んで言っているが、要するに、日本の地名や国名をローマ字で怪しげに綴って見せただけのもの。地名だけでなく拾五ヶ國 JIUGOKAKOKU, 拾一ヶ國 JIUICHIKAKOK, 附り TSZKETARI 等もローマ字で綴っているのは御愛敬で、とても「英國作文ノ一助トナ」ったとは思えぬが、それでも、当時の人は喜んだのであろう。

さて、次の「横文字六大洲國盡」は、「英字國盡」と違って、色刷りの美麗な地球図や世界地図が挿み込んであり、外国の

「英字三體大日本國盡」本文・冒頭

地名が英字三体で列記され、「此國ハ気候炎熱ニシテ、所産ノ物ハ、砂糖、綿、迦啡、スヒセス及ヒ、数多ノ珍菓アリ」（巻二―62巴里 BRAZIL）、「英吉利西隣ノ一小圃タレドモ、奇山迤逦トシテ、其光景画クガ如ク、最モ人目ヲ慰ムルニ足ル」（巻一―86穴列斯 WALES）等といった記事も僅かながらあるといった具合で、未だ見ぬ遠い国々に対する憧れを十分かき立ててくれる書物であったと思われる。紙数の関係から、そのすべては紹介できないが、管見に入った二本のうち、巻一の亜細亜、歐羅巴ノ部の概要を記すこととする。書型は次の如くである。

中本左袋綴一冊。表紙　青紫色地紙に松皮菱模様空押し。竪一八・二、横一二・五糎。題簽　子持ち枠付短冊形白紙、表紙中央上寄りに貼付。上に「横文字」と右横書きで小さく角書きし、その下に「六大洲國盡亜細亜ノ部 歐羅巴ノ部全」と記す。竪一三・七、横二・九五糎。扉　オモテは、匡郭内を中央の欄が幅広になるように縦に三ツ割にし、中央に「NAME OF THE/LAND ON

THE/GLOBE」と出し、界線を置いて下方に「六大洲國盡」と大きく書名を記す。そして右の欄上方に「松園橋爪貫輯」と出し、下方に小判形の枠を作り、その中に「亜細亜歐羅巴之部」と記し、左の欄に「東京　誠之堂梓」と版元名を出す。ウラは匡郭内に「VI. DAISHIU/KUNI/DZKUSHI」とローマ字表記の書名を記す。

序題　六大洲國尽序」。尾題　六大洲國盡初編終」。

柱刻　白口。上魚尾黒。「英學六大洲」、下方に丁付。丁付　一～十六。丁数　一六丁（扉一＋序一＋凡例半丁＋索引一＋本文一二丁＋広告半丁）＋奥付。別に西半球・東半球の見開き図と、ASIA, EUROPEの色刷り折り込み地図各一枚あり。匡郭　四周単辺。竪一五、横九・九五糎。行段　本文は横組み有界八行二段。

刊記　後見返し貼付の奥付左方に「松園　橋爪先生著作」と出し、界線を置いて右に「明治四辛未年九月／東都書林／今川橋通西福田町製本所　誠之堂岩次郎／本石町貳丁目十軒店椀屋喜兵衛」と記す。また、終丁ウに「六大洲國盡　二編三編嗣出／滑稽窮理雑談　初編ヨリ／訓蒙名物圖解　初編近刻／洋筭訓蒙圖會　二編嗣出／大全世界旅雀　初編二編近刻」と、六点の広告を出す。序文は次の通りである。

泰山を挾んで北海を越んとするは、皆人情の赴く所なり、近時洋學愈盛んになりて、丁稚小童に至るまで、一搬に彼の地理を解き、其書も又多し、故に誠之堂主来て、其地名の原語を輯録する事を望に依て、其概畧を記載して以て是を與、然りと虫も、我國の地理を置て、他邦の地理を解くは、之、人の疝積を頭痛に病むの類ならんと、欺ることなかれ

明治四辛未季八月　橋爪貫誌（印「松／園」「橋爪／貫印」）

そして、この序文に続いて次の様な凡例がある。

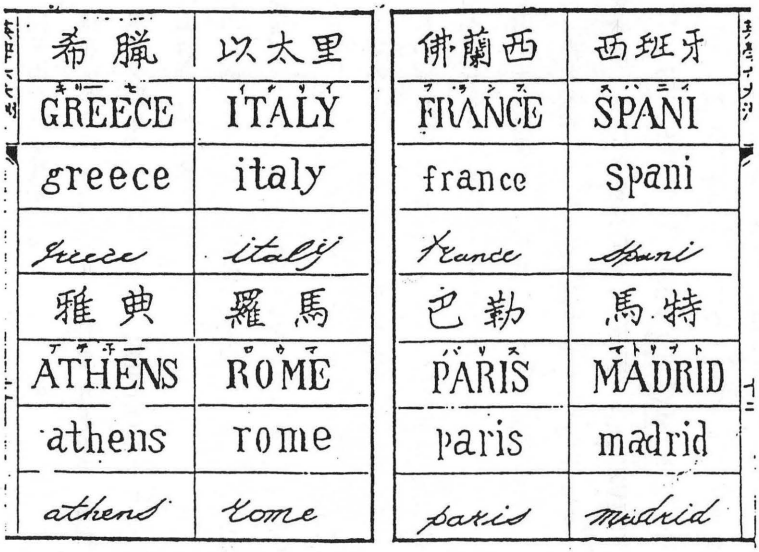
此書ハ國盡ノ名ヲ命スト虽モ、其下辺ヘ首府ノ名ヲモ舉タリ、猶山川湾港及ヒ國名ノ遺漏セル者、名所古跡等ハ、編ヲ追テ之ヲ掲示スベシ

國都ノ名ヲ聞テ之ヲ索ルハ容易ナリト虽モ、蟹行字ヲ以テ之ヲ求ルハ難シ、故ニ今「ヱビシ」ノ順序ヲ追テ、其地名等ノ頭字ヲ挙タリ、仮令ハ LONDON ト在ルハ、L ノ部ニ LON（十五ノオ）、之ヲ得テ以テ本編ヲ見ルベシ　　明治四未歳仲秋　橋爪貫誌」

右の凡例に言うように AEG（エオ）、ANA（ヱウ）、ARA（ヱウ）の如く、巻頭にアルファベット順の「索引」がある。AEG は AFG の誤刻で AFGANISTAN（亜加業坦）、ANA は ANAN（安南）、ARA は ARABIA（亜拉比亜）のこと。本文は「英字三體大日本國盡」と同じく、はじめに漢字見出しを立て、次に活字体大文字（片仮名付訓アリ）、同小文字、筆記体小文字の三体で示す。亜細亜 ASIA、日本 JAPAN、東京 TOUKIYAU～氷州 ICLAND、舌蘭嶌 SHETLAND に至る八八の地名・国名を収載するが、英吉利 ENGLAND、瑞西 SWITZERLAND、都伯林 DUBLIN、越陳堡 EDINBURGE の如き例もあり、訓みはあまり感心できない。

なお、巻二は巻一と同体裁で十八丁。地図は五葉。題簽の副題には「亜弗利加ノ部／南北米利賢ノ部」とだけあるが、扉には「亜非利加、海國／南北米利賢及／海島之部」とあって、アフリカ～カスピ海に至る一〇二の地名をあげる。明治四辛未歳仲秋　東京製本所　近江屋岩次郎刊。「海國」は OCEANIA のこと、「海島」は部立てをしていないが、巻末の加律比海 CARIBBEANSEA、日本海 SEA OF JAPAN、太平洋 PACIFIC OCEAN～裏海 CASPIAN SEA の部分を指すらしい。巻一のヤッパンがジャッパンになっている等、こちらも訓や綴りに曖昧な点が目立つ。

右に見た如く、橋爪貫一は、明治三年～五年にかけて、仏学、英学関係の初等入門書や綴字書を十点余り編纂し刊行



| 希臘 | 以太里 | 佛蘭西 | 西班牙 |
|---|---|---|---|
| GREECE | ITALY | FRANCE | SPANI |
| greece | italy | france | spani |
| Greece | italy | France | Spani |
| 雅典 | 羅馬 | 巴勒 | 馬特 |
| ATHENS | ROME | PARIS | MADRID |
| athens | rome | paris | madrid |
| athens | rome | paris | madrid |

「六大洲國盡」本文・11ウ12オ

しているが、それと併行して、「童蒙必讀年號巻」や同「皇諡巻」、「州名巻」を明治三～五年にかけて著述出版し、漢語辞典である「新撰字類」を、松屋貫一名で明治三年七月に刊行している。彼の活動は幕末に始まるが、ざっと眺め渡してみると、明治五、六年を境に、その著作活動は、洋モノから和漢の辞典や初等入門書、用文章の方に移って行っているようである。その中、例えば「童蒙必讀州名巻」（明治三年原刻。明治五年版、七年再刻本アリ）は「英字國盡」に通じるし、「萬國地誌略字引」（明治八年）は「六大洲國盡」に、「外史譯名地名人名官職之部」（明治一一年）は國盡や「英學苗字盡」「名頭字盡」等に通じる。それらについても云々すべきであろうが、既に紙数を大巾に超えている。いずれ別稿で報告することとしたい。

（注）

（1）「世界商賣往来」は、〔正〕、續、續々、補遺、追加と五編まで出ているが、松園橋爪貫の署名のあるものは、

管見に入ったものでは〔正〕・續の二編のみ。〔正〕編は明治辛未（四〈一八七一〉年）晩秋下浣の序刊で、明治六年十月、東京書林青山堂青山清吉梓の「校正再刻世界商賣往来」といった異版もある。〔正〕編の序文は「洋舶交易以来、世間通行之書簡文章、頗襍二漢譯西語一、童蒙児女子、往〻有二難レ讀者一焉、余為レ是著二小冊子一名曰下世界商賣往來上」云々と平凡であるが、續編の方には、著者の心情が多少窺えるので、次に示すことにする。

續世界商賣往来自序

或人曰。世稱二著作家一者。有二三等一矣。以二高明正大之言一。奬二諭士民一者。為二之上等一。其倣レ之。而力稍〻劣者。為二之中等一。以二瑣〻之片句隻言一。而告二閭巷之細民一。如二松園子一者。是謂二之下等一。然針二砭不化之俗耳一之功。最居レ多焉。余窃喜テ曰。苟余所レ為。有レ功二於世教一。則豈敢以二大方君子之嗤笑一。俄頃易レ地乎。譬夫十個之世人中。其三。必従二事〆洋西學課一。而已化之民也。其二。必不レ漢不レ洋。乃半化之民也。其五必市井僻遠之頑陋ニ〆。而乃不レ化之民也。化二於半化之民一。且非レ易。況於二不レ化之民一乎。夫其扶二高明之論一。而自居二上等一者之所レ係。十人中僅二人耳。下等余輩所レ係者。十人中居二其半一。且其難易。果〆安在欤。然則下等余輩之功。却出二於上等之上一。是乃余所下以二技拙才疎一。而至レ死不上レ辭也。余所レ著。世界商賣往来者。雖二僅〻小冊子一。勉以レ易レ了二暁俚俗一。為レ要。聞其書。已在二小學校之初學課中一。余喜何言。嗚呼焉可レ無二後編一哉。終以二此言一。贅二卷端一。

于レ時明治五壬申十月也　松園主人自譔

（2）CHANGHAI : IMPRIMERIE DE LA MISSION PRESBYTÉRIENNE AMÉRICAINE, すなわち、〈ボンの「和英語林集成」（慶応三〈一八六七〉年）や、薩摩学生の「和譯英辭書」（明治二〈一八六九〉年）等を印刷した上海の米国美華書院刊。一八七一年二月付の譯者の序文に Ce volume est une traduction du dictionnaire de poche, bien connu, des langues française et anglais, par M. NUGENT. とあり、Nugent の仏英辞典が基になっていることが判る。Nugent は Thomas Nugent のことで、その仏英辞典とは、一七六七年にロンドンで初版が出た A New Pocket Dictionary of the French and English Languages in two parts である。同書はその後、版を重ざね、一八一八年にはパリで Ouiseau による増訂版 Nouveau dictionnaire de poche françois-anglois et anglois-françois の第一七版が出ている。そしてその後も一八五〇年に第三九版、六五年に四七版（Nouveau dictionnaire de poche français-anglais et anglais-français）

と版を重さね、さらに異版も多く出ている。まさに譯者の言う bien connu よく知られた著名な辞典であったのである。その中で本書が底本としたものは、序文中にその緒言を長々と引いている第二一版のロンドン版か、第三〇版である。

（3）「日耳曼字十躰いろは」「獨逸捷徑七以呂波」――「七ツいろは」の流れ――「藝文研究」60号（一九九二年三月）

（4）「英學捷徑七ツ以呂波」の数字は一～十と、百、千、零、「英學捷徑九體伊呂波」の方は一～三十と、百、千、一萬、十萬、百萬、それに零である。発音の異なる個所を次にあげる（はじめが七ツ以呂波、後が九体以呂波）。一、ワン――ウオン、三、スリ――ズリー、五、ファイフ――フイフ、七、セーフン――シーフン、百、hunderd――one hundreo 千、thousand――one thousand 零（nought）ノウト――ノー。hundred については双方とも綴りを間違えているが、九体以呂波では一萬も Hounderd thousand としてしまっている。

（5）五体のものではないが、後の國盡しとも関連するので、苗字盡、國盡、名頭字盡が合本となった幕末期の一本を紹介しておく。

中本一冊。竪一七・四、横一一・三糎。共紙表紙。（後表紙は「吉」「田」の名を菱形の中に入れた格子模様のもの。）外題　桜花と縞模様のある飾り枠内を界線で縦に三ツ割りにし、中央に「苗字盡國盡名頭字盡」と大きく書名を出し、右に「蘭香堂墨跡」、左に「東都馬喰町四丁目吉田屋文三郎板」と記す。内題　各々にあり、「名頭字」（一オ）、「苗字盡」（三ウ）、「大日本國盡并郡付」（六ウ）。尾題　名頭字盡終」（三オ）、「苗字盡終」（六オ）、「大日本國盡終」（一四ウ）。柱刻　白口。上方に題名、○を置いて下方に丁付。「名頭字　○一（～二）」、「苗字盡　○三（～四）」、「名字盡　○五」、「國盡　○六（～十四）」。丁数　十四丁。刊記　終丁ウ本文末左下スミに「馬喰町四丁目吉田屋文三郎板」とある。また後見返しに「消息往来繪抄」～「同（用文章繪抄）三編」に至る十三点の絵抄類の口上書き付き広告があり、末に「東都書林馬喰町四丁目吉田屋文三郎板」とある。匡郭　四周単辺。毎半葉五行。

「名頭字」は、源、平、藤、橘～乙、音の一五一種に、右衛門～三郎の十種をあげ、末に殿、様を各々四体の字様で示す。「苗字盡」は、松平、前田、伊東～山田、佐野、田中に至る一一三名。「大日本國盡」は、五畿内五箇國～西海道九箇國、それに二島六十六州之外（壹岐、對馬）までを収載する。